

# 学部生を対象とした野生動物問題に関する ロールプレイング型ワークショップの実践

桜井 良

## Role-playing Workshop Regarding Wildlife Issues Targeting Undergraduate Students

Ryo SAKURAI

### Abstract

Wildlife is causing a variety of problems such as damage to the crops and human injuries for local and urban communities in many parts of the world. It is indispensable for us to deepen our understanding of wildlife issues for dealing with them. The purpose of this paper is to clarify what kind of stereotypes students tend to have on wildlife issues in Japan, the factors that contribute to form their attitudes toward nature conservation, and educational methods to reduce stereotypes on wildlife issues.

Some students had the following stereotypes of wildlife issues: (1) the Japanese are nature-friendly people, (2) we must protect wildlife under any circumstances, and (3) hunting is a cruel and evil conduct. Yet, Japan has also faced pollution and environmental problems due to their own environmentally unfriendly behaviors. Moreover, with more habitats for some wildlife species due to the decline of human population in rural areas, their population has increased rapidly, necessitating their control chiefly by the means of hunting. It seems that the mass media was very influential in the formation of the above stereotypes, but students in the class answered that they were most influenced by school education, followed by actual experience, the mass media, family members, and books on the formation of their attitudes toward nature conservation.

It is considered that educational attempts to enhance their knowledge on nature conservation is crucial for overcoming these stereotypes, therefore, I have offered courses on human dimensions of nature conservation for both Japanese and international students at Ritsumeikan University. In the class, students learned a variety of wildlife issues in Japan, the worldwide efforts to achieve the coexistence of humans and wildlife, and research and practical methods for solving them. Then, they were asked to engage in a role-playing workshop for dealing with human-bear conflicts in a hypothetical town of about 100 people in Osaka. This workshop is expected to help them to reduce stereotypes on wildlife issues by learning that there are a variety of attitudes on a given issue and by understanding the context in which problems occur.

### 1. 日本の野生動物問題について学ぶことの 意義

農山村地域における獣害（農林業被害、人身被害など）

や都市部における野生動物の出没とそれに伴う被害など、野生動物問題は世界各地で起きている。それらは例えばインドにおけるトラと地域住民との軋轢、北米におけるオオカミとの共存をめぐる問題、ケニアにおけるゾ

ウによる農業・人身被害、そして日本における数年に一度大量出沒するツキノワグマの問題などである。開発によって生息地が破壊され、野生動物が人間の住居エリアに出沒することもある一方で、日本では地方における少子高齢化により里山が管理されなくなり、野生動物が人の住むエリアの近くまで生息域を広げているケースが多い。これらの野生動物問題の解決のためには、関係者で野生動物及び獣害に対する理解を深め、課題を共有し、協働していくことが不可欠である。例えば、農業被害であれば地域住民、行政、研究者などが連携し、地域ぐるみで対策を講じることが重要だ（山端, 2009; 桜井・松田・丸山・ジャコブソン, 2013; Sakurai, 2019）。野生動物問題が起きる背景（生息地の破壊、生息地の拡大、対策の不徹底など）は多様だが、解決方法（関係者間での問題の共有と協働、コミュニケーションなど）は世界共通である点が多く、特に日本は、少子高齢化や狩猟者の減少による野生動物の管理者の不足などもあり、野生動物問題においては課題先進国と言われている。今後多くの国で同様の課題に直面する可能性があることを踏まえると、日本の野生動物問題を学ぶことは学生にとって自然との共存を考えるうえで良い教材であるといえる。

著者はこれまで野生動物問題、そして広く生物多様性保全をテーマに英語で教える授業（科目名：Human Dimensions of Nature Conservation）を複数の大学で開講してきた。この授業は2014年度は千葉大学国際教育センター（当時）が提供する科目として、2015年度以降は立命館大学政策科学部の英語基準の学位プログラムであるCommunity and Regional Policy Studiesの科目（Vision Building Special Lecture）として開講している。同科目では環境問題、特に野生動物問題に焦点を当て、生物多様性の危機、日本における野生動物問題や地域の問題（過疎化、高齢化など）、そして世界各国における野生動物との共存を目指す地域主体の取り組みについて説明し、また野生動物問題の解決を目指すアプローチ（ヒューマン・ディメンション<sup>1</sup>）について、特に聞き取りの手法や合意形成を目指すワークショップやファシリテーションについて講義している。

ここ最近の同授業の受講者数は、2016年度は15名（出身国：中国7名、日本3名、韓国2名、米国・インドネシア・フランス各1名）で、2017年度は14名（出身国：中国7名、日本3名、インド2名、インドネシア・韓国

各1名）であり、出身が様々な学生が受講している。

## 2. 野生動物問題を学ぶ上で学生が持つステレオタイプの特徴

このテーマを学ぶ上で、何人かの学生は最初にいくつかのステレオタイプを持って授業に臨んでいるように見える。一つ目のステレオタイプは、「日本人は自然に優しい」というものだ。初回授業時の学生による自己紹介の際に、本授業を履修した理由として「日本人は自然に優しい民族なので、この国の自然保護の現状について学びたい」と話す学生が毎年数名いる。こう話すのは留学生（出身国が日本以外の学生）が多い。果たして日本人は自然に優しい民族なのだろうか。歴史を紐解けば、例えば4大公害（水俣病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく、新潟水俣病）が起きた背景には急速な発展と、これに伴う環境破壊があり、特に近代以降は日本は周りの自然環境を改変・破壊することで発展してきたともいえる。公害に関する救済や裁判は現在でも続いており、日本において公害は現在も続く問題ともいえる。野生動物種に焦点を当てると、近代以降ニホンオオカミ、ニホンカワウソなど複数の種が生息地の破壊や乱獲などにより絶滅している。現在においても、わが国では木材の多くは海外から輸入されており、熱帯雨林の木材も含まれ、国際貿易として間接的に環境破壊にいまだに関わっているともいえる。こういった事実がある中で、なぜ毎年数名の学生が自己紹介時に「日本人は自然に優しい」と話すのだろうか。

二つ目のステレオタイプは、「野生動物はいかなる事情があっても保護しなければならない対象だ」という考えだ。これは英語基準コースの学生（主に留学生）にも日本語基準コースの学生（日本出身の学生）にも多い。現在、世界中で生物多様性が急速に失われ、野生動物の保護が国際的に最も重要な環境問題のテーマであることは事実だ。環境破壊・環境改変により多くの生物は生息地を失い、また乱獲により多くの生物の個体数そのものも減少している。現在、世界中の哺乳類及び鳥類のおよそ12%が絶滅に瀕しており、生物種が同時に消えてしまう大量絶滅（6,500万年前の恐竜類の絶滅など）がこれまで地球上で5回起きてきたが、現在は6番目の生物の大量絶滅の真ただち中にあるともいわれている。これが人為的原因によるものであることは間違いない。こ

の問題について、まず理解することが重要であり、著者の授業でも最初の数週間で生物多様性の価値や現在進行形の問題について講義をしている。一方で、増加する人間活動による生物種の減少という構図は、日本国内に目を向けると少し状況が異なる。2008年の環境省が設置した生物多様性評価検討委員会の報告によれば、日本では昨今開発の速度は減少傾向で、里山における人間活動の衰退による生物種の減少（水田が管理されなくなり消失することで、そこに生息していたドジョウやカエルが住処を失うなど）や外来生物の増加による在来種の減少（奄美大島に導入されたジャワマングースによるアマミノクロウサギの捕食など）が大きな問題となっている（日本自然保護協会 2010）。地方では少子高齢化や過疎化により、廃村になる地域も増え、耕作放棄地も増加し、これにより一部の野生動物の生息域は増加傾向にある。1970年代以降シカの生息地面積は2.5倍に、イノシシの生息地面積は1.7倍になり、個体数も増加している（環境省、2015）。これらの野生動物が増えることで、森林が劣化し、別の野生動物種（カモシカなど）が減少し、一部では地域絶滅している。つまり特定の野生動物の急増とそれに伴う生物多様性の危機が日本では起きているのである。

保護の重要性を認識することは大切だが、増えすぎた野生動物（シカやイノシシなど）については、保護だけではなく個体数管理の重要性を学ぶことが不可欠だ。シカやイノシシだけでなく、例えば人を襲ったクマやアライグマなどの外来種についても、積極的に管理（時には駆除）することが求められる。

そして三つ目のステレオタイプは、「狩猟が残酷で悪い行為だ」という認識だ。日本を含め多くの国で狩猟は伝統的に行われてきた営みで、生活の一部であったといえ、また今日においては増えすぎた特定の野生動物の管理のために狩猟が重要な手段となっている。特定の希少種を守るために保護もしながら、一部の増えすぎた野生動物については個体数管理をしていくことが重要で、わが国では鳥獣保護管理法が2014年に改正され、保護からより管理に焦点を当てた内容（住居集合地域に出没した野生動物について知事の許可のもと捕獲が可能になり、また狩猟免許取得年齢を20歳から18歳に引き下げるなど）になった。こういった背景や現状を理解しながら、野生動物とほど良い距離感を持ちながら共存するために狩猟の意義について考える必要がある。

### 3. ステレオタイプの正体とその背景

前節で学生は初回授業時にいくつかのステレオタイプをもって臨むことが多く、それらは「1. 日本人は自然に優しい（主に留学生）」、「2. 野生動物はいかなる事情があっても守るべき」、「3. 狩猟は残酷で悪い行為」というものだと説明した。そもそもステレオタイプとは何だろうか。社会心理学ではステレオタイプを「ある社会的集団（人々）に関する知識、信念、期待（予期）によって構成された知識構造であり、集団カテゴリーに対する知識あるいは信念」（池田・唐沢・工藤・村本、2010, 116）と定義している。これに基づいて考えれば「1. 日本人は自然に優しい」は日本人という集団カテゴリーに対する信念なので、ステレオタイプといえる。一方で、「2. 野生動物はいかなる事情があっても守るべき」、「3. 狩猟は残酷で悪い行為」は特定の集団に対しての考えではなく、単なる信念であるとも考えられ、更にこのような考え方をしていることが社会・集団の中で望まれていると学生が意識的・無意識的に感じているのであれば、規範（集団の中で共有されている適切な行動や考え方）となる。

「1. 日本人は自然に優しい」というステレオタイプが起こる背景として、日本が環境に優しい国だとするメディアによる報道（ネットやテレビなど）を学生が見た可能性がある。ネット上には日本が環境に優しい国（eco-friendly country）だとする英文記事が多く存在する。地球温暖化問題に世界各国が対応すべき内容を初めて定めた京都議定書は、気候変動枠組み条約第3回締約国会議（COP3：1994年）が京都で開催されたこともあり、「京都」という名前が入っているが、日本が気候変動対策を世界に先駆け、先導したという印象を与えるかもしれない。また、2004年に持続可能な開発への貢献によりノーベル平和賞を受賞したケニア出身のワンカリ・マータイ氏は、日本語の「もったいない」が環境問題を考えるうえで重要な概念であると考え、自然や物へのリスペクトを示す言葉としてMottainaiを世界共通の言葉に広めようとした。このような事例やネット報道は学生の考え方に多少なりとも影響を与えるかもしれない。米国で行われた研究によれば、子供は環境に関する情報の大半をメディアから学んでおり、大人はほぼ全ての情報をメディアから得ている（Coyle, 2005）。ネットやテレビなどメディアが学生の意識に与える影響は他

の国でも大きいだろう。

一方で、「日本人は自然に優しい」と話すのは日本に  
来た留学生（英語基準プログラム所属）が多く、日本人  
学生（日本出身の学生）がこのように話すことはほとん  
ど聞いたことがない。

環境社会学の研究では、一般市民、観光客、研究者な  
ど地域住民以外の外部の人間を「よそ者」と定義し、例  
えば特定の野生動物種と人間との共存において、「よそ  
者」が外から眺め、見出す・感じる価値と、地元の人が  
考える現状が大きく異なることを明らかにしてきた。例  
えばコウノトリは日本では絶滅危惧種であり、守るべき  
対象、価値ある種と「よそ者」は考えるが、地域住民に  
とっては、時に田んぼを荒らす害鳥であった（菊地、  
2002）。下北半島のニホンザルは北限のサルとして世界  
的に希少な野生動物で国の天然記念物に指定されてい  
るが、それは「よそ者」が見出した価値で、地域住民に  
とっては農業被害を出す厄介者でもある（丸山、2006）。  
対象もスケールも異なるが、日本にやってきたばかりの  
留学生（「よそ者」）が見る・考える価値が、メディアな  
どによって見出された価値（例：日本人は Mottainai と  
いう精神を持ち、物や自然を大切にす民族であるとす  
る信念）である可能性があり、それが日本で育ってきた  
現地の人間（日本出身の学生など）の考え方や現状と異  
なることは理解できる。

「2. 野生動物はいかなる事情があっても守るべき」と  
いう信念（規範）は留学生においても日本出身の学生に  
とって見られるもので、これもメディアの影響が大き  
いかもしれない。例えば、「バンビ」、「ブラザーベア」、  
「ファインディング・ニモ」など動物が主人公のディズ  
ニー映画の多くは、動物を守ること、保護の重要性を訴  
える内容であるように感じる。「もののけ姫」を見たこ  
とがある留学生は毎年少なからずいるが、この映画も自  
然との共存の重要性を訴えているように見受けられる。  
「野生動物はいかなる事情があっても守るべき」という  
信念があれば、当然野生動物を捕獲・捕殺する狩猟は悪  
い行為になり、「3. 狩猟は残酷で悪い行為だ」という信  
念につながることは想像できる。

学生に自然保護の重要性を認識させるうえで、学校教  
育も大きな役割を果たしている。例えば環境教育は現在  
世界中の学校教育の中で、教科としては位置づけられて  
いないとしても、様々な授業・課外授業の中で直接的・  
間接的に教えられている。日本では1991年、92年の「環

境教育指導資料（中学校・高等学校編）」、「環境教育指  
導資料（小学校編）」の刊行に伴い学校教育における環  
境教育の重要性が明確になり、また2003年の「環境の  
保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する  
法律（環境教育推進法）」の制定などにより環境教育が  
国の施策の中でも重要な要素と位置づけられるようにな  
った。韓国や台湾などでも環境教育は学校教育の中で  
重要な要素として位置づけられている。世界の他の国で  
も同様のことが言えるだろう。つまり、自然保護観を学  
生に涵養させるうえで学校教育は大きな成果をあげて  
いるともいえる。

また実体験に基づいて自然保護の重要性を切に感じ  
る学生も少なからずいるようである。例えばマレーシア  
やインドネシアからの留学生が、自分たちが住んでいた  
地域の周りの森林があつという間に破壊・開発されてし  
まったと話しているところを何度か目にしたことがある。  
環境破壊がそれほどまでに顕著ではなくなったと言  
われる日本に対して、こういった実体験をしている学生  
の思いは切実である。そのような学生にとっては、「自  
然は守るべき」という思いは、規範（集団から期待され  
る）というよりも実体験に基づく信念なのかもしれない。

「1. 日本人は自然に優しい」というステレオタイプに  
話を戻そう。初回授業時の自己紹介の際に、「日本人は  
自然に優しいので日本から学びたい」と話す留学生が毎  
年数人いることはすでに述べたが、その後、授業が進む  
中で同じような発言は学生から全く聞かなくなる。その  
ような発言があるのは最初だけのようだ。なぜだろう  
か。学生の発言の背景にあるものとして、社会調査にお  
いてよく課題としてあげられる社会的望ましさ（social  
desirability）バイアス（Groves, Fowler, Couper,  
Lepkowski, Singer & Tourangean, 2004）の可能性も考  
える必要があるかもしれない。一般的な社会調査におい  
て、例えば聞き取りの際に回答者は自分をよく見せるよ  
うな、そして質問者を喜ばせるような回答をする傾向が  
あることが知られている。初めて、日本に留学してきた  
学生が最初の授業で教官（日本人）に「なぜこの授業を  
とったか？」と聞かれ、日本の現状の詳細は知らないも  
のの「日本人は自然に優しいのでその姿勢を学びたい」  
と答えるのは、ステレオタイプではなく、単にリップ  
サービス（社会的望ましさバイアス）による回答であつ  
た可能性もある。

では、学生の信念（ステレオタイプ？）の背景に何があるのか。著者の授業では毎年学生に「何が自分の自然保護観、自然保護に対する意識に影響を与えたか？」というテーマでレポートを書いてもらっている。ここで紹介するのは2017年度の授業における学生のレポートの内容である（表1）。14名の受講者のうち、自分の自然保護観に影響を与えたものとして一番多く書かれていたのが、学校教育であり、出身国に関係なく、小学校や高校で学んだこと、授業中に取り組んだ課題についてなどが書かれていた。次に多かったのが実体験である。インドや中国出身の学生などは、母国で多くのゴミが路上に捨てられていたこと、身近な自然が瞬く間に開発されてしまったことなどを述べていた。また、家族旅行でアメリカやカナダを訪問した際に、自然が保護されていることを学んだと回答している学生もいた。特筆すべきは、フィールド調査を主に行う大学の授業の一環で、滋賀県のとある集落に合宿し、地域住民の生活について学んだ留学生（中国出身）のレポートである。この学生はフィールド調査で地域住民の暮らしぶりを参与観察し、聞き取り調査をする中で、この集落の住民がいかに水資源を大事に利用しながら持続可能な生活をしているかを学んだようである。この経験を踏まえ、同学生は「日本人（特に彼女が見た滋賀県のとある集落で暮らす住民）は自然に優しい」と考えるようになったようで、実際に現地で詳細を調べたうえで学んだことが彼女の発言の下地にあるのである。

もう一つの特筆すべき点は、3番目に多かったのがメディア、次が家族で、本から影響を受けたという学生は1名のみだったということである。メディアが学生の考え方に大きな影響を与えていると当初は著者自身考えていたが、学生のレポート結果を見る限り必ずしも一番

多いわけではない。更に、本を学生はあまり読むことがないのか、または本を読んでもそこから考え方に影響を与えられることは自然保護観に関しては、少なくとも受講生の中にはほとんどないようである。

このレポート結果から、学生の考え方に影響を与えているものを把握するためには、先入観で考えるよりも実際に学生に聞いてみるのが重要であることが分かる。学生の生の声、率直な回答に真実があると思われ、また学生も年々で傾向や特徴が異なることは常々あるので、授業毎に学生と意見交換をし、率直なフィードバックをもらいながら、学生の現状を理解することが教員には求められる。

#### 4. 知識の不足を乗り越えバランスよい視野を持つために

3節ではステレオタイプが起こる背景について説明するとともに、そもそも学生の考え方・主張を一概にステレオタイプと決めつけることができないことを説明した。本節からは、ステレオタイプまたは知識の不足・偏りを乗り越えるために何が必要かを考えたい。

学生の考え方に最も影響を与えていたものが学校教育であったように（表1）、知識の不足・偏りはやはり教育により改善していくことができるのではないだろうか。野生動物は、対象としている種、背景、状況により保護すべきものとコントロール（時には駆除）しなければならないものに分けられ、野生動物管理において狩猟者が果たす役割は大きい。こういったことをバランスよく学ぶ・理解することが求められる。

では授業の中で、学生はどのように考え方を変容していくのだろうか。表2では、著者が担当する授業

表1. 何があなたの自然保護への考え方に影響を与えたか？  
(2017年度の授業のレポート課題における学生 [n=14] の回答結果：複数回答可)

影響を与えたもの	回答者数
学校教育（小学校の授業など）	10
実体験（母国 [インド、中国など] で身近な自然が破壊されていることを目の当たりにした、アメリカ/カナダなどの環境先進国に旅行に行った、大学のフィールド調査で実際に見て学んだなど）	8
メディア（テレビ、ドキュメンタリー番組など）	6
家族（両親からなど）	5
本	1

表 2. 授業のスケジュールと内容

週	内 容
1	Introduction; what is nature? (授業概要：自然とは何か?)
2	Human life and natural environment; value of natural resources, biodiversity (人々の暮らしと自然環境：自然資源の価値、生物多様性) Conservation of nature; history of environmental issues in Japan, framework for natural resource management (自然の保全：日本における環境問題の歴史、自然資源管理の枠組み)
3	Conservation of endangered species (絶滅危惧種の保全)
4	Wildlife in Japan; Number of species in Japan, the population trends of bears, boars, deer and monkeys (日本の野生動物：日本における種数、クマ、イノシシ、シカ、サルの個体数の変化)
5	Rural villages and wildlife conflicts; depopulation and aging in local communities, human-bear conflicts (地域社会と獣害：地域コミュニティにおける少子高齢化、人とクマとの軋轢)
6	Students' involvement in wildlife issues: student-rangers for protecting wildlife damage (野生動物問題に対する学生の取り組み：野生動物被害を防ぐことを目的とした学生レンジャー)
7	Hunting; decrease and aging of hunters in Japan (狩猟：日本における狩猟者の減少と高齢化) Explanation about debate (start preparing for debate) (ディベートに関する説明：ディベートに向けた準備)
8	Group-work about debate (ディベートに向けたグループワーク)
9	Debate (ディベート)
10	Living with wildlife; cases of all over the world (野生動物との共存：世界中の事例より)
11	Academic discipline of Human Dimensions of Wildlife (ヒューマン・ディメンションという学問について) Survey & interview to encourage collaboration; preparing for interview exercise (協働を促すためのアンケートと聞き取り調査：聞き取り調査に向けた準備)
12	Interview exercise (聞き取りの実践) Facilitation and workshop; importance of reaching consensus (ファシリテーションとワークショップ：合意形成を得ることの重要性)
13	Preparation for workshop; group-work (ワークショップに向けた準備：グループワーク)
14	Workshop; solving human-bear conflicts (ワークショップ：クマと人との軋轢の解消のために)
15	Review of workshop; presentation by evaluation group (ワークショップの総括：評価委員会からの発表)

表 3. 2014 年度の授業 (千葉大学) における学生から提出されたレポートの内容 (桜井 2016 をもとに作成)

レポート番号 (課題が出された週)	レポート数	環境問題・野生 動物問題に関する 学び	異なる国の出身 の学生と議論す る中での学び	コミュニケー ションに関する 学び
1 (第 2 週)	10	8	9	0
2 (第 3 週)	9	8	2	0
3 (第 4 週)	10	8	1	0
4 (第 6 週)	8	8	2	1
5 (第 7 週)	7	5	0	0
6 (第 9 週)	11	8	5	0
7 (第 10 週)	6	5	2	1
8 (第 12 週)	6	1	3	4
9 (第 13 週)	8	1	1	4
10 (第 14 週)	7	4	4	7
合計	82	56	29	17

Human Dimensions of Nature Conservation のスケジュールをまとめた。前半部分では生物多様性及びその危機、中盤では、日本における野生動物問題や地域の問題（過疎化、高齢化など）、そして世界各国における野生動物との共存を目指す地域主体の取り組みについて説明し、後半では野生動物問題の社会科学的側面に焦点をあて、その解決を目指すアプローチ（ヒューマン・ディメンション）について、特に利害関係者の意識の把握のために必要な聞き取りの手法について、また関係者同士の合意形成を目指すワークショップやファシリテーションについて講義している。学生への教育効果を高めるために、一方的な講義ではなく、毎授業において講義の後に、学生同士が特定のテーマについて意見交換をし、発表する時間を設け、またアクティブ・ラーニングとして、ディベート（例：「日本にオオカミを再導入すべきか」などのテーマに対して賛成・反対に分かれ議論）、聞き取り演習（学生同士で特定のテーマに関する信念を聞き出す練習）、そしてワークショップ（学生が地域住民や研究者などの役割を演じ、問題の解消に向けた合意形成を目指すロールプレイング型ワークショップ）などを行っている。これらの授業を受け、学生は何を感じ、何を学ぶのか、学生のレポートやフィードバックから考察したい（本授業の教育効果に関する詳細については桜井（2016）を参考にされたい）。

表3は学生から提出されたレポートの内容についてまとめたものである。授業の序盤では環境問題・野生動物問題についての記述が多く、聞き取りやワークショップの演習をした終盤ではコミュニケーションに関する記述が多くなっており、授業内容に沿ったレポート記述となっていることが分かる。

野生動物問題については、例えば

「日本でクマ、イノシシ、シカがそれほどまで大きな問題を起こしているとは知らなかった。私がいた州（ウイスコンシン）では、クマが生息しているが、それほど問題は起きていなかった。」（アメリカ出身の学生）という回答や、また「4大公害についてなど、日本でこれまでに起きた、または現在起きている環境問題について初めて知った」という感想などが多く書かれていた。また野生動物管理における狩猟者の役割、狩猟の意義について学んだ学生が多くみられた。

「里山では、狩猟者を含む人間が重要な役割を果たしていることを学んだ」（日本出身の学生）

「私は狩猟が悪い活動だと思っていた。狩猟の重要性が分からなかった。しかし、今は私は狩猟者の役割を理解した。日本における狩猟者の減少を食い止めるために、我々はまず狩猟者の役割を知る必要がある。」（日本出身の学生）

そして野生動物管理における狩猟者の役割としては、講義だけでなく、狩猟が日本に比べ今でも盛んな国（アメリカ、フィンランド、オーストラリアなど）を出身とする留学生と議論する中で、実感として学んだケースも多かったようである。「アメリカの学生と議論し、海外では狩猟が盛んな国があることを学んだ。」（日本出身の学生）

授業や他の学生との議論を通して、学生は「日本人は自然に優しい」、「野生動物はいかなる時でも保護すべき」、「狩猟は悪い行為だ」といった偏った考え方から、より現実・事実をもとにした、そして多様な事例（海外の事例も含め）を学んだうえでの、バランスのとれた考え方ができるようになると思われる。

興味深いことは、この授業を通して学生は様々な事実や考え方を学ぶだけでなく、自分自身がそれまで持っていた信念についても今一度考え直す機会にもなるということである。

「米国と日本におけるクマに対する人々の意識の違いに関するディスカッションで、私は人々の意見が環境や文化によっていかに異なるかに気付いた。私は米国で生まれ、育った。従って、他の日本人の学生のクマに対する意見を聞き、私のクマに対する視点は、日本で育ってきた人のものとは異なり、アメリカ人のものに近いことに気付いた。私の意見は自分が育ってきた環境によって形成されたと思う。」（アメリカ出身の学生）

よりバランスの取れた知識を身につけるためには、まず自分の知識や考え方の偏り（場合によってはステレオタイプ）について認識することが重要である。教育（講義、アクティブ・ラーニング）によってそれらを学生に気づかせるきっかけを与えることができる。

また、ステレオタイプや知識の不足・偏りを乗り越えるための有効なその他の手段がフィールド調査である。特に野生動物問題については、実際に被害が出ている地域を訪問し、現状を視察することが有意義である。2018年から著者も Human Dimensions of Nature Conservation の授業以外に、キャンパス近くの山間部の里山を定期的に訪問し、農業体験、被害対策の視察、



図1. 野生動物問題について学ぶためのフィールド調査を主体とした授業の様子。(左から里山地域における農業体験、野生動物被害を防ぐための電気柵などの視察(中央)、農家や行政職員への聞き取り(右))

農家・住民・行政職員・狩猟者などへの聞き取りをするフィールド調査を開始した(図1)。百聞は一見に如かず、という通り、実際に現場を訪問し、農家と農作業をともにし、被害対策の大変さを実感しながら、聞き取り調査を通して様々な関係者の考え方を理解することで、学生はそれまでの机上の、またはメディアによる知識に対して、実体験を通し現場の実情を学んだうえでのバランスの取れた知識を獲得していくことになり、教育効果は大きい。

次の節では学生が自身の考え方や知識の偏り・不足に気づくために有効な教育方法であるロールプレイング型ワークショップについて紹介する。

## 5. 野生動物問題について理解を深めるためのロールプレイング型ワークショップの実践

本授業の集大成として学期の最後に行っているのが、日本の野生動物問題をテーマにしたロールプレイング型ワークショップである(図2)。野生動物問題の奥深さを学生が学ぶ上で、そして前の節で述べたステレオタイプ、または知識の不足や偏りを学生自身が理解し、更に協働の重要性を理解するうえで、ロールプレイング型ワークショップが重要な学習ツールとなる。ワークショップは学期の最後(14週目)に実施し、それまでの授業で学んだことを踏まえ、「OIC村の人とクマとの軋轢問題の解決のために」というテーマのもと、関係者間で合意形成を図ることを目指し行われている。

ロールプレイングとは、学習者が現実起こる場面を想定して役割を演じ、疑似体験を通して、実際にある事柄が起きたときの適応力を身につける学習方法である。ロールプレイングは、教育支援を目的として古くから実施されており、現実問題を別の角度から捉えさせ、また相手のおかれた社会的環境や相手の行動を理解



図2. 2016年度の授業における学生によるロールプレイング型ワークショップの様子

させるという点において社会教育的効果が大きいと言われている(木谷ほか 2002)。本授業では、学生は特定の役割について事前に勉強し、更にワークショップ中は他の役割の学生の意見を聞くことで、単に様々な考え方や意見があることを学ぶだけでなく、考え方の裏側にある背景(例:野生動物被害を受けている住民、野生動物を見たい観光客など)を理解し、これはステレオタイプ、知識の不足の解消に寄与することが期待される。

ワークショップは、具体的には大阪府茨木市の里山におけるクマによる獣害問題をテーマに実施した。なお、立命館大学が位置する茨木市は山間地域に里山の景観が広がり、獣害が発生しており、クマの出没も確認されている。こういった背景を踏まえながら、ワークショップでは人口100人程度の茨木市の中山間地域の仮想の村(キャンパス名であるOICにちなんでOIC村と仮の名前をつけた)を設定し、クマの被害が多くなっている仮想のシナリオのもと話し合いをした。本ワークショップでは、学生をファシリテーター、被害農家、市の職員、県の職員、生態学者、文化人類学者、動物愛護団体、狩猟者、観光客、電気柵等の販売をする企業の社員、そしてワー

表 4. ワークショップ実施前後の流れ

第 12 週	教員がワークショップのテーマを発表し、役割を決定し、学生はその日の宿題として演じる役割に関係する文献を読み、それを踏まえた自分の役割に関するレポートを書く。ファシリテーターの学生は、ファシリテーションの仕方に関する文献を読み、当日のワークショップのスケジュールや目標をまとめる。ワークショップ評価委員会はワークショップの評価方法について文献を読み、評価をするためのアイデアや手法をまとめる。
第 13 週	授業で、同じ役割の学生同士でグループディスカッション（その役割を演じた学生が 1 名の場合、他の役割の学生とディスカッション）を行い、役割の共有をするとともに、教員はそれぞれの役割に求められることや文献の探し方について説明をする。第 13 週の宿題では、教員からのコメント、グループディスカッションを踏まえ更に複数の文献を読み、役割に関するレポートの改善版を提出する。
第 14 週	授業で、ファシリテーターの先導のもとワークショップを行い、90 分間の間に何らかの合意形成を図ることが課され、ワークショップ評価委員会はワークショップの流れやそれぞれの役割の学生の発言や態度などを詳細に評価する。第 14 週の宿題では、ワークショップの感想や改善点をそれぞれの学生がレポートにまとめる。
第 15 週	授業で、ワークショップ評価委員会が、ワークショップの評価結果や改善点などを発表し、その後、同じ役割の学生でワークショップの反省点などを再度グループディスカッションし、その後クラス全体で話し合い・ワークショップの良かった点、改善点、気づいた点などを共有する。

表 5. 2015 年度の授業におけるロールプレイング型ワークショップの大まかな流れ

1	ファシリテーター	ワークショップの説明。野生動物問題に関する現状や政策などの説明を県職員に依頼。
2	県職員	野生動物管理に関する大まかな政策や県の立場の説明。電気柵を張る場合は行政から半額の援助ができることなど説明。電気柵の具体的な金額については企業に説明を依頼。
3	電気柵等の販売をしている企業	OIC 村の田畑の規模を踏まえ、電気柵を設置する場合、各農家が平均的に 30 万円程度かかることを説明。
4	市職員	研究者と連携して、一度捕獲したクマに GIS をつけて、放し、行動を追うことを提案。
5	生態学者	クマの生態を説明。更に、クマの狩猟が禁止されてから、個体数が増加しているなど、歴史的経緯を説明。
6	文化人類学者	地域住民ができるクマ対策を説明。また、普及啓発活動の重要性を指摘。
7	動物愛護団体	クマの捕獲や捕殺に反対を表明。一方で、住民への普及啓発活動については同意。
8	狩猟者	通常はシカやイノシシが狩猟対象であり、クマはあまり狩猟したことがないこと、また有害駆除ができるエリアも決められているので、住宅地付近のクマなどは撃てないことなどを説明。
9	観光客	里山を訪れた際は野生のクマを見てみたいというのが本音であるが、自分たちも被害に逢わないよう注意していると説明。
10	ファシリテーター	以上の点を踏まえ参加者に、どのような解決策があるかを考えるように参加者に依頼。
11	農家	電気柵を張ることはお金がかかり、管理に労力も必要なので、行政やその他から何か援助はもらえないか質問。
12	企業	電気柵をまとめて購入してもらえらるなら、ある程度割引を適用できることを説明。
13	観光客	自分たちは実際に里山を訪れ、宿泊代や体験活動のお金を払うので、エコツアーの客として貢献できると説明。
14	生態学者	狩猟して被害がどの程度減るかはわからないので、農家は例えばクマがあまり好まない農作物を栽培するなど、工夫できる点はあると説明。
15	県職員	行政としてエコツアーに資金的援助をすることはできないが、できる限りのサポートをすることを説明。
16	農家	電気柵の代金を企業が割引してくれ、また行政からの半額の補助があること、更に観光客がエコツアーとして宿泊し、対策活動の助けをしてくれる、ということを確認できたので、この方針でやっていきたいと説明。
17	ファシリテーター	ワークショップのまとめと参加者へのお礼を述べて終了。

クシヨップ評価委員会に分け、それぞれが役割演技（ロールプレイング）をすることが課された。ワークショップ実施前後の具体的な流れは表4の通りである。

また例として、2015年度の授業で実際に実施されたワークショップの大まかな流れを紹介する（表5）。

ロールプレイング型ワークショップの教育効果を探る上では、学生が書いた事前事後レポートが参考になる。例えば、2015年度のワークショップにおいては、学生の事後レポートで、1. 野生動物問題における重要な要素を理解し、2. 多様な考え方や利点が存在することを理解し、3. 様々なツールはあるが、地域に応じて対策を考えなければならないことを理解した、などが書かれていた。コミュニケーション能力については、多くの学生が他者の意見を理解して聞くこと、合意を図ることの重要性を指摘していた。また資料を探し、使えるものを用いて、議論に臨むことで情報収集力を身につけたと書いていた学生もいた。また、一部の学生はワークショップへの準備における学習を通して、自国での野生動物管理に当てはめながら考え、地域や文化を超えた野生動物問題の共通性と違いを理解していた。

## 注

<sup>1</sup> ヒューマン・ディメンション（Human Dimensions of Wildlife Management）とは、野生動物保護管理における社会的側面に焦点を当てた学問分野で、管理上の意思決定をするうえで有益な社会的な情報を提供することを目指しており、米国で1970年代より発展してきた。

## 参考文献

- Coyle, K. (2005). *Environmental literacy in America: What ten years of NEETF/Roper research and related studies say about environmental literacy in the U.S.*. Washington DC: The National Environmental Education & Training Foundation.
- Groves, R. M., F. J. Fowler., M. P. Couper., J. M. Lepkowski., E. Singer., and R. Tourangeau. (2004). *Survey Methodology*. New York: Wiley-Interscience.
- 池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村木由紀子（2010）『社会心理学』有斐閣。
- 環境省（2015）改正鳥獣法に基づく指定管理鳥獣捕獲等捕獲事業の推進に向けたニホンジカ及びイノシシの生息状況等緊急調査事業の結果について。 <http://www.env.go.jp/press/100922.html> <2017年3月15日アクセス>。
- 菊地直樹（2002）「兵庫県但馬地方における人とコウノトリの関係論－コウノトリをめぐる「ツル」と「コウノトリ」という語りとかかわり－」。『境社会学研究』9, 153-169.
- 木谷忍・長谷部正・新井潔・平松成美（2002）「地域づくりを題材にした環境教育の実践－ロールプレイング・ゲームを用いた山形県金山町の事例－」。平成11年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書：135-154.
- 丸山康司（2006）『サルと人間の環境問題－ニホンザルをめぐる自然保護と獣害のはざまから－』昭和堂。
- 日本自然保護協会（2010）『改訂 生態学からみた野生生物の保護と法律－生物多様性保全のために－』講談社。
- 桜井良・松田奈帆子・丸山哲也・S. K. ジャコブソン（2013）「栃木県における獣害対策モデル地区事業の開始と今後の課題」『野生生物と社会』1（1），47-54.
- 桜井良（2016）「多国籍の大学生に対する野生動物問題に関する授業の実践と効果－学生から提出されたレポートの定性的分析より－」『環境教育』26（1），38-51.
- Skurai, R. (2019). Chapter 9: A collaborative approach for coexistence with wildlife in rural regions of Japan. in Frank, B., J. A. Glikman., and S. Marchini, editors. *Human-Wildlife Interactions: turning conflict into coexistence*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 山端直人（2009）「集落ぐるみのサル追い払いによる農作物被害軽減効果－三重県内6地区での検証－」『農村計画学会誌』28, 273-278.